

## 東濃農林事務所の普及活動状況

令和5年10月

### ぎふ農業・農村を支える人材育成

#### ■新規就農者 新規就農者の営農支援

新規就農者支援を行う「サポートチーム（構成員：市、J A、県など）」は、10月17日、認定新規就農者に対し個別巡回を行った。対象は、昨年度、瑞浪市で認定された若手農業者であり、露地野菜中心の経営について、状況確認と助言を行った。

管内の野菜生産は、農産物直売所や地元量販店への個人出荷が中心で、直売所は開設後10年が経過、出荷者の高齢化が進んでいるため、販売額は伸び悩んでいる。このため、次代を担う農業者を育成することで、将来、地域の中心的な担い手となることを期待している。

今後も、新規就農者に対し、栽培技術や経営安定向上に向けたフォローアップを強化するなど、伴走支援を継続していく。



【チーム員による現地確認】

### 安心で身近な「ぎふの食」づくり

#### ■トマト 東濃地域のトマトをめぐる状況

東濃管内では、地域の標高差を活かし、冬春トマトで2戸、夏秋トマト（中玉・ミニ含む。）で3戸、計約80aの規模で栽培されている。

冬春トマトでは、当地でも黄化葉巻病が増えているため、昨年度、黄化葉巻耐病性品種「かれん」を導入、10月中旬から出荷が始まり、安定生産が見込まれている。

夏秋トマトでは、大玉品種として桃太郎系に代わり、裂果が少なく品質向上が期待される「麗月」の栽培が増えている。今年は記録的猛暑の影響で9月以降販売価格が高騰しているが、8月下旬からの収穫となる「晩期セル苗定植作型」も収穫ピークと重なり販売は好調である。

また昨年から、トマトを想定した就農相談も増え、今年も既に3件ほどの実績となっており、夏秋トマトでの就農認定に向けた計画づくりを進めている。

今後は、農業者や関係機関等との連携により、トマトでの新規就農や栽培改善による経営安定を目指し、イチゴとともに地域の園芸品目の柱として育てていく。



【夏秋晩期作型の着果状況】

### 地域資源を活かした農村づくり

#### ■6次産業化 農業の6次産業化に向けた取り組み

多治見市南部の営農組織は、10月下旬に農業6次産業化への取り組みをさらに発展させるため、県が登録した「6次産業化実践アドバイザー」の派遣を受けた。

同組織は、令和4年度に農地の有効利用による地域活性化のために組織化され、主に露地野菜の他、金針菜（きんしんさい）やマイクロ野菜といった珍しい野菜の栽培を行っている。

同時に、県補助事業により乾燥機を導入し、乾燥野菜の周年販売を始めたが、販路開拓が課題となっていた。

当日は、アドバイザーが、営農組織の経営概要や加工に必要な機器の活用状況、商品などについて聞き取りを行い、販売先など助言をいただいた。

今後は、6次産業化支援のほか、新たに学校給食への野菜の安定供給も検討するなど、当地域の活性化に向け支援していく。



【アドバイザーとの面談】